

B 宮城県コース 氏名 小川 輝久 S38年 経済卒

南三陸町の被災跡地の惨状は私の想像を絶していた。荒涼たる跡には、剥きだしの裸地、道路だけが延々と残り、原形を僅かに留めた数棟の建物跡には人影もなく、町は全てに余りにも静か過ぎて、逆に無残さを強調していた。でも、それは2年8カ月前、この場所で、奪う者は情け容赦なく奪われる者に襲いかかり、奪われる者は抵抗する術もなくただ必死に逃げ迷った阿鼻叫喚の世界があった事を私達に示して呉れた。

住民の暮らしと生命を支えた豊穡の海、麗しの海が、「天災」という一言で荒れ狂い、人の命も財産も思い出さえも一気に奪うことを、誰も想像出来なかったのか。また、その天災に命を奪われた人々は最後の瞬間、愛する人、肉親に別れの言葉をどのように述べたのだろうか。思わず涙した。

私は案内のボランティアガイドさんが、最後に言った一言が今も心に残る。「皆さん、これは人災です。天災ではありません。1万8千人の尊い命を奪った人災です」。太陽圏の果てまでロケットが飛び、無数の人工衛星が地球を周回し、瞬時に情報を伝える科学の時代に、被災者への正確な大津波情報を伝達出来なかった事はどうしたことか。また、力強い復興というには程遠い現状はどう理解すれば良いのか。私は今回の悲劇の真の原因をもっと追究すべきだと思う。

得てして我々は、都合よく過去を忘れてしまい、徹底究明を怠る。しかし、それが再び、不幸を生む。戦後、66年、再び見え始める戦争の影にその愚を思う。